

□第12回国際医療福祉大学学会学術大会 特別講演□

創学30周年に向けた本学のこれから

鈴木 康裕¹

1995年に創学された本学・国際医療福祉大学は3年後の2025年に創学30周年を迎えるが、創学時の3つの主要テーマはいまだ色褪せず、ますます重要な教育と研究、診療の屋台骨になっている。

まずは、障害を持つ方も病める方も、健常な方も、ともに働き、行き、暮らす「共生社会」(図1)の実現だ。全国の医学部を持つ大学の中で、関連施設として本学ほど障害者施設や高齢者施設、児童施設を有するところ(図2)は、私の知る限り、ない。これは、少子高齢化や生産年齢人口の減少など、医療と福祉の将来を見据えた、貴重な研修の場と機会を提供していると言える。

次に、「多職種連携」(図3)だ。本学創学時は、ほとんどのリハビリテーション職種の養成校が専門学校であったが、本学は日本で初めての「医療と福祉の総合大学」として創立され、全国トップレベルの国家試

験の合格率(表1)を誇るのみならず、多くの優秀な各分野のリーダーを排出してきた。

日本のほとんどの医学部を持つ大学が、医学部を起源とし、各医療職種の学科をその後に創設しているのに対し、本学は逆で、各種の医療職種学科が創設された最後に医学部が創設された。これは、医師を頂点として周辺にその他の医療職種を配置する考えではなく、各医療職種とともに医師も連携しながら医療をともに支えるという考え方に立脚するものだ。

最後に、本学の名称にも含まれる国際性、諸外国の大学や医療機関との連携(図4)である。各学科にアジアを中心とする諸国から留学生が来訪しているが、特に医学部では、一学年140名のうち、約20名が留学生、約20名が帰国子女という、まさに国際的な学生構成となっているだけではなく、こうした学生が成績上位者の多くを占めている。来日して間もない彼ら

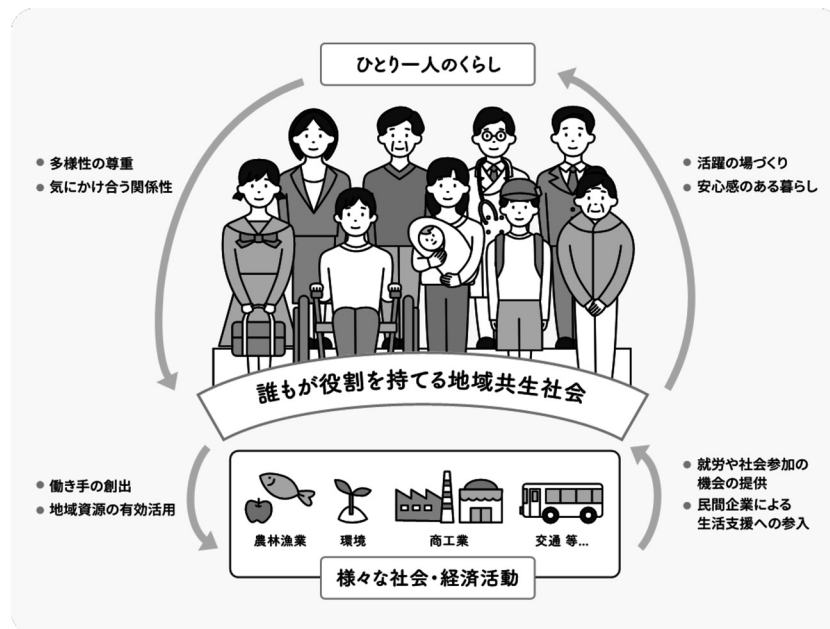


図1 共生社会

出典：厚生労働省 (<https://www.mhlw.go.jp/kyouseisyakaiportal/>)

¹ 国際医療福祉大学 学長



図2 国際医療福祉大学の関連施設

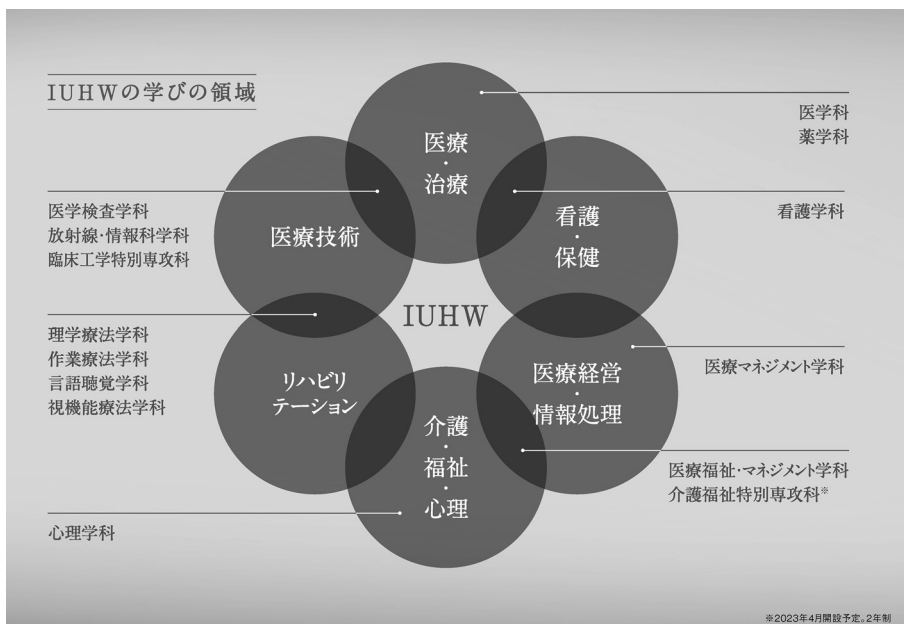


図3 国際医療福祉大学の学びの領域

が入学式で就学の誓いの言葉をしっかりとした日本語で行うのを見るとき、「現代のフルブライト奨学金」が将来もたらす大きなインパクトの予感に胸が熱くなる。

この3つのテーマに共通する底流は、「多様性」とい

うことだと思う。健康に不安を持たない者や医師だけ、日本人だけではなく、異なった精神や身体、経済的な状況や学習経験、文化的・社会的背景にある者たちが、一同に会して、個人にとってだけではなく、集団や社会にとっての最適解を、心理的安全性（psychological

表1 国際医療福祉大学の国家試験合格率と全国平均値 (%)

	大田原	成田	小田原	大川	全国平均
薬剤師	97.8				68.0
看護師	99.0	99.1	100.0		91.3
保健師	94.2	100.0	100.0		89.3
理学療法士	96.8	97.5	100.0	95.8	79.6
作業療法士	95.1	95.1	100.0	95.1	80.5
言語聴覚士	98.6	100.0		100.0	75.0
視能訓練士	100.0				91.8
診療放射線技師	99.0				84.7
臨床検査技師		87.2		79.4	75.4
社会福祉士	69.3				31.1
精神保健福祉士	76.0				65.6
介護福祉士	100.0				65.3
臨床工学技士		100.0			80.5

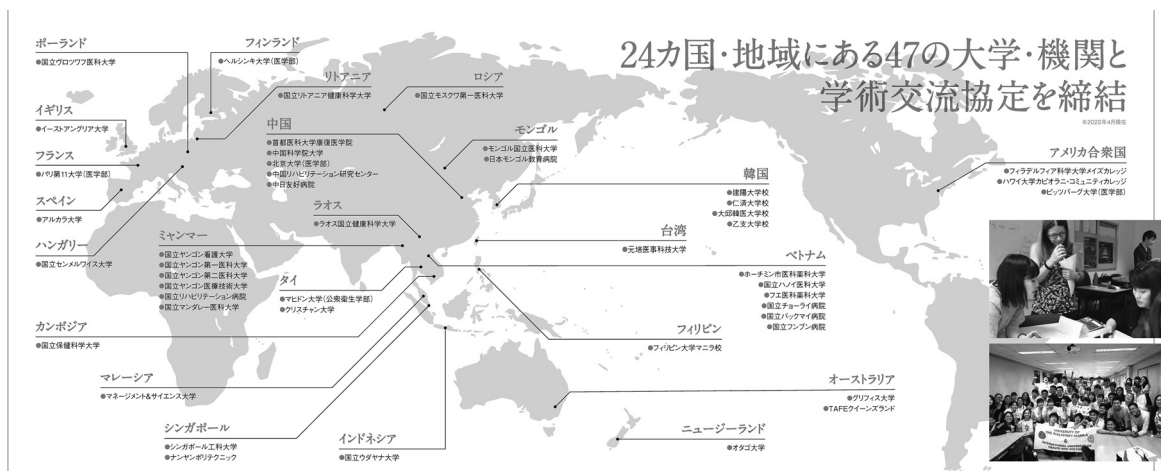


図4 各国にある国際医療福祉大学の連携施設

safety：組織の中で、自分の考えや気持ちを、誰に対してでも、安心して発言できる状態)が確保された議論を通じて求めてゆくプロセスこそが、これからの社会の規範となるだろう。

世界はいま、VUCA (Volatility (不安定さ)・Uncertainty (不確実さ)・Complexity (複雑さ)・Ambiguity (あいまいさ))の時代に突入したといわれるが、かつて強大を誇った恐竜が地球環境の大きな変化を契機に絶滅した事実から見ても、環境の激変に対しては、強大さや頑強さではなく、変化への対応を許容する多様性を持つことこそが強靭性を保証することはつとに知られている。

すでに多様性を建学の基礎においている本学に今後求められるのは、イノベーションを通じた各種の革新的な取り組みを社会実装していくリーダーたらんと努めることだと思う。

我が国の国際的な競争力は円安の影響もあって低下しているようにみえるが、「他人を慮りながら真摯に努力を続け、なにごとと諦めない」という私達が共有している価値観こそが、有限な資源の中で平和に共存しながら進化を続けていく秘訣だろう。

そうした社会の歩みの中で、述べてきたような特質を持つ本学が中心的な役割を果たしていくであろうことは論をまたない。